

「お婆ん心配しいな、頭の上に釣たある」

「一寸下ろしとくなはらんか」

「お婆ん、此の品何んや」

「ハイ、お家主の旦那さんが誠に親切なお方で、年寄が船に乗つて便所へ行くのは難儀やと云ふて焙烙に砂を入れて下さつた」

「何や、これお婆んの便器か」

「コラ、其様物をいたゞかしやがつたんか」

「お婆ん、これ新らしいやろな」

「ハイ、今宿屋で一ぺん使いました」

「モウ、一ぺん使ふたやんやと、頭の上に有る下ろしいな、(パチン) 破れたがなアハハハ……」

「オイ、早う船を出し」

「オーウ、出しますぞ」

乗りまへが極ると船頭さん、舳舫を解きまして歩板を引上げました、赤檣の長い櫂を突張りますと岸を放れました、船を艦下げに致しまして川巾の廣い所へ参りますと船をギイット廻しますと、二挺の櫓には必ず四人の船頭が付きましてガツクリ〜と漕ぎ出します。

「いや、うんとせい」(囃子鳴物(唄)伏見濱から船漕ぎ出す) 船が出ますと必ず船頭が歌を唄ひます、今船が出たでと云ふ報せにそうするのやそうで、そうすると遅れた人が出て來ても直ぐに乗れます。

「いやれ伏見中書嶋ナア……泥鳴なあれどよ、なぜに撞木町やナア……簸の中よ、ヤレサよいよ
いよを……エ」

ポオーン (鐘の音)

船が出ますと中書嶋に船頭さんの馴染の女子さんが橋の上へ來て、

「勘六さんいナア——上りかいな、下りかいナア——」

「何を吐すぞい、年中船頭を相手に仕て居て上り下りの解らん奴があるか、船が下を向いておりや下りに決つて居るぞ、クッ」

「お主の様に云ふものぢやない、上り下りの解らん中が花ぢやと思へ、上り下りが解る様になつたら船頭ぐらいに相手にならんは」

「われはまた合點〜して錢を取られとれ、あの幻妻宵仕切何程ぢや……何三百ぢやて、やれ恐そろしや、あんな幻妻に三百出すなら米を買ふとくは」

「姫買ひと米買ひと一緒になるかい」